

# BOSTON NOTE

Special note to the High School.

全時考

全時考

6

ホ  
ス  
ト  
ン  
ノ  
ー  
ト

INDEX

CHAPTER

PAGE

PM's La Concepteur

受胎告知

薬師寺 街

(昭和十八年六月廿七日 子不)

白中

(本名倉田敬之助)

今平島正然死

ふた

裏

amicis

(指原カ)

I

ウラ白

雑記

《ソロモシよ

ふじやうなな 十べこはあましいと  
さうしておいて  
おれをこりせん はようおしなる

I

なみきつてかかやまつつ  
童子は無心のり面うしろつ  
—ふもぢぢはゆましらす  
なかにあふる

いはけをきき電子すう  
かくの音にるかぢや  
かからてへよりころ  
つねにわろ泣くぢは

はんけんしんじつかあしきは なかにあつさ  
このかたくなるのりぞ  
向腰うつぢは  
てんうんこそそなまいけん

カ文  
字と鉛筆で書

いしりばきまらまはてし  
つゆいとこころすいりるれば  
なみふとくちのれさうあて  
あともしてどちぞいし

II

さよのせふ くち山ののろろ  
かえらばかえれ  
なれいほおせれ  
わかこころ いまふとむいふかふはん

かちりししめいとるやふ 吐水  
とこほろるまはせふ  
ふんちばわれをちげふしむ  
しんじつあまういまつらげれは

雨 雨として  
かえまこむさうてむさうやまが  
わか悔つり

さこひもしらむはてるまひとく  
かすのるる悔つり  
ふんちばわれをばくくむ  
やまひつりとまあまさせ

ふんちばわれをもてなす

III

すつこのあつなるもの  
さみりあり

林檎とわかちん  
つがえそ手さばうき

はら小あつのは

林檎のてがなや

くほしくいむよべまきんす  
必定わがてりらんとけ入らう

林檎のてがな

われのえとんあう

かすみにほむ

なちふ入る

IV

わのりこり身の

身不もるの言のしうへは

ふん身をなやませまぬらすへし

そはわが罪なす

ゆすぶはあすよ

十方世界

まがなこころこ

ゆるりゆり

まがなかなちよき 願 蓋はは

かたのしりえぬ 夢のより

とは夜ごといふ身をもてなし

しづかひなすさるなうん

としよ

夜空の星はしまる

ひかりしはる

すべなまもろが

しんをるしうはとらへむるへからず

星のひかりが

人向のこころが

この 鱈又の手に

V

まがなゆく木の葉よ

かのかとよ 塵木よ

ふんぢられいっせうなく

かせとみつといのちあり

かれはさからはんとはあらず

せと時とんをがす小てらんとおれおなり

かまらるを 感恩の おれひもて

わが地盤に 標 一人こもかまなり

としよ

わが地盤をむらしとよや

ちかちかどうちなてなるわが標としも

なれものもるしとよや

せいむらしきもつなし

童子は川面をノフ

いのちなり

童子は川面をノフ

X X X

わがはるんものも 解せ

この不可解のまつねおるすいあつて

いのちをよする五月

なれものも 解せ

はるせはけんけうはるん

いっしん

とまうてぢぢ  
ひらうしやまうつうちしぢぢぢ。

II

うら白

おろていす

おろていす

おろは白きぬもろ

こつ國の海<sup>いみ</sup>の洞<sup>い</sup>に

すぢと人つゝぢ

眼ま

かろは白き

ああらんぢ

濁せを絆のんをせぢぢ

あがはははわし  
物かんをを弱ぼぢ

よくめしぢぢ

光りを結せぢぢ

安は白し

思よを交くして

脳悸水をすぢぢぢ

わかかつて詩人ぢぢしとき

ぢぢぢぢぢ

浄せぢぢを愛しぢ

いぢ

人つ位ぢぢ

まにまに

ときい

ぢぢぢしくもをもんをわぢぢ

水のじと

こころをぢぢぢとまは

泣、喜

かそぢぢぢ

あせぢぢとぢぢ

洞<sup>い</sup>穴<sup>ぢ</sup>

光りに入ぢぢ

おろていす

そよ一匹

しつちん

わかこころん

よびなへりぬのを抱よこさる

かろてこうす

奇十ととり

わかこころん

わか

うまーすと様、そあり。

雨中鶏圖

にはかあめん

めんうとらひなとり

とやいぬくわぬ

そんとりよ

なんちつちば

かろつくして

あめをまくか

となく、屋根をさし

かべをぬらし

いまは

しんかあつわく

はてそまろりて

あほ一を

ましろき

そんとりよ

なんちば

ひろくはら

くひくちやう

あむろまっつち

まゆんとすま

なんちの身は

あらばるれい

なんちの腹は

あまうんちひとし

ひとあしひとあし

ふみあふ

あけつち

あやがつちまけ

この

はてなまあめを

なんちば

せころむのち

かつてそえ

いまそまつ

まふまふなんちのあめを

そんちほ

永劫さしせうへし  
かくて

やあひろき

ふんせんごの庭を

ふくわけて

ましろなる

そんじりは

かまねやせと

あめはるほ

しきみんかろ

とん、とん、とんし

そんじり

すひさま跡を  
かまけしなり。

鳥賊

鳥賊は

ひねもす

せんさんなる光

指ゆいにくうなる海

あのか

ひそなる影をまもる

ひせりるれは

すかたしろうく

長えて

かの

海は澤いぬ

觸れしや

まここ

はるなる

けしあたまをまもる

いところめては

あましく

やんらなる

魚のまなこ

つみんを

名玉をそそぐ

かくて

いあつた

うらはしく

身は

すきこほり

こころをびしく

あのか  
ましろを  
影を

くらめて



儀 云々 へ へ へ

蝦

蝦

おどろくことば

おまへうまかいるやで

前後たむんちつくとへつてぬの魚のほらと

ついでみるやう

あるほど

この魚屋のなまび

生まへおのうは

おまへはさうい

ぬか

おまへこそばさ

かしらよことば

よくある 魚 ぬ

おまへはとんかし

かんのうばらとつつき

かんなんてぬのこととせしぬの

おまへにけかをまてぬのことと

そのまま感じて

すこしうま

はいつりまはれ

ぬんつくす

おれぬおまへこそつくうぬとらぬことと

考へへぬつぬのは

ぬんとぬぬぬぬぬ

おれは

おれぬつぬらぬ

やまころす

それぬら

このおまへの流儀ぬか

まさぬ

おれのぬぬぬぬぬ

ぬぬぬぬぬ

ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

おれは

おれぬ生まへぬぬぬ

ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

はっまふと

さとうてぬぬぬぬぬ

おれのぬぬぬぬぬ

おれぬぬぬぬぬぬ

ぬぬぬぬ

此のやうな、死にたえて

おれとおまへとが

のこるは、うう

そのとまこそは

おれは

おれがつかうとやまころすのをやめ

のうとく

おまへといひのみり

おまへ

のこくひをぬかやが

おまへ

おまへのすゝめといひ

おれが心臓を

つぎぬし

かくて

おれとも

死んだえりかう

おれはしり様り新妻をゆらつてぬ

おれは

おれほど遠い未来をあらうか。

IV

うう白

金魚

あり

金魚はあらし

おれがうへへ

しんてぬ

しんてぬ

おれはあらし

金魚のうへへ

はげてま

金魚は

しんてぬ

はつあしひつた

おれはあらし

金魚は

おれはあらし

秋

とちの木は

白きやめをまひらば

とちの草は

秋ふかく

かげのひと

しろみちり

はせり

あかき葉は

かましくも

秋うらみも

いつしんい

とめぬまろ

はせり

こころとつらめ

ちみらつめて

あぢぬてらり

日をへつ

土とちりしり

とちはいま

ちかきいぬて

ちみかつ

ちみつちぎは

わかちせて

ちみこつぬ

芽月の夜

いま

草下や木をひうんてさつ

いれちとちも

いせる芽をぬしてぬらひせり

ちみかかん

葉いさつ

ちみちつちりすつち

とちつ

ちみしりちみ

ことしちみ

芽かちてち

ちみ

葉のひかり

ちかちつちりすつち

ちみ

それかきましくして

いっせ

芽を

ゆき芽と

長母まつかしらとちよひす

かましーこことひすね

かましは

奥々金尾のやうに

かみやうに

ふこつ

こことし

きり月をむろへまゝに

はぶのうがたいがア

こことしおまけちうに

おんたに

つばさのあかやみせて

やせしく

あうわつと

なみちのあうてこをつたに

うらやましくなつた

しまひに

なごけなうなつた

紅茶

小鳥は

もうあまくなつてゆら

ひらわいしうは

入をことさるみつちのあまうらうらう

んこおとをぬすむとよ

ぶた

とまう本がうあつたとき

ボツケリイニの曲は

このやうにうつくしのうたか。

IV

うら白



あまのこころをいさすにまらぬかへりて  
 あまのこころをいさすにまらぬかへりて  
 かつて。

人形

あまのこころをいさすにまらぬかへりて  
 のはまが あまのこころをいさすにまらぬかへりて  
 をせまへ ちかちかしてぬる あまのこころを  
 くしきは 萬人のこころをいさすにまらぬかへりて  
 ひとに ぬくと あまのこころをいさすにまらぬかへりて  
 つげぬることか あまのこころをいさすにまらぬかへりて  
 かつては 賢明といふはまらぬかへりて  
 いや ままのこころをいさすにまらぬかへりて  
 防壁を下すまらぬかへりて  
 のほほろろ 他のはほほろろ  
 は そういふは ままのこころをいさすにまらぬかへりて  
 しんぬのこころをいさすにまらぬかへりて  
 微塵はほほろろのこころをいさすにまらぬかへりて  
 あまのこころをいさすにまらぬかへりて  
 かねらるる あまのこころをいさすにまらぬかへりて  
 ナしろみずのこころをいさすにまらぬかへりて  
 せうくも あまのこころをいさすにまらぬかへりて  
 いがて ままのこころをいさすにまらぬかへりて

かり かねらるる あまのこころをいさすにまらぬかへりて  
 ましあつしうをいさすにまらぬかへりて  
 いしく あまのこころをいさすにまらぬかへりて  
 てあつて。

林

ホイルとまれ。あまのこころをいさすにまらぬかへりて  
 ほくはけらるる あまのこころをいさすにまらぬかへりて  
 他かわるるあまのこころをいさすにまらぬかへりて  
 まへとあるいしほくもこころをいさすにまらぬかへりて  
 。そして、さつさつあまのこころをいさすにまらぬかへりて  
 せく、小鳥のこころをいさすにまらぬかへりて  
 ずかちねととりまわし、それひ、この林を  
 みるまは、ほくはけらるるあまのこころをいさすにまらぬかへりて  
 を合得するまらぬかへりて。それへ、ほくは、  
 せけひ、まらぬかへりて。ほくは、まらぬかへりて  
 の必要と、まらぬかへりて。ホイル眼をつ  
 かつてける。まらぬかへりて。あまのこころをいさすにまらぬかへりて  
 らるるあまのこころをいさすにまらぬかへりて  
 。あまのこころをいさすにまらぬかへりて。眼とどろ  
 て、一耳をまらぬかへりて。まらぬかへりて。簡光をいさすにまらぬかへりて  
 のち。まらぬかへりて。まらぬかへりて。まらぬかへりて  
 、いさすにまらぬかへりて。まらぬかへりて。まらぬかへりて



お茶時

—— 思島庵の作 (念歌集 下)

(原美術館蔵)

お茶時は、甘藷普茶の、あまじうしんつじは  
物なるぬ。このとびとせ、それをしてぬ  
る。お茶時は、つみいすいせ、物なるぬ。

お茶時は、あまじうしんつじは、  
いせせのばるやかせとせへらめい。書物

お茶時は、あまじうしんつじは、  
お茶時は、あまじうしんつじは、  
お茶時は、あまじうしんつじは、

お茶時は、あまじうしんつじは、  
お茶時は、あまじうしんつじは、  
お茶時は、あまじうしんつじは、

お茶時は、あまじうしんつじは、  
お茶時は、あまじうしんつじは、  
お茶時は、あまじうしんつじは、

お茶時は、あまじうしんつじは、  
お茶時は、あまじうしんつじは、  
お茶時は、あまじうしんつじは、

連度

—— 過失死について

金持のぼるみしんは、かとりころ。サツが  
、まんまんとうびき、岩角にあちつては、し

おもとるのついでか、そのまつしうき地は  
、しつまい、雷いりて、一時ととまるやう

いみえ、そのままをこしとぬ。あまじうしん  
かかひのつ、眼のしどの景色は、アアと

おつ、山平は、はえてぬ、とわうその箱か、あし  
もとるこまこいやう。いかんを混れさせる

アは、汽車と鉄橋、お屋するせはしやな音で  
あつ、このわうで、あつと感いり、は、も

うぬの瞬向である。風ま、つりあはつ、ア  
やあせ、必だに、汽車の進行を、おまき感して

ア、あまじうしんつじは、いおんに、納得せ、  
あつ、あまじうしんつじは、いおんに、納得せ、

おまき、おまき、おまき、おまき、おまき、  
おまき、おまき、おまき、おまき、おまき、

おまき、おまき、おまき、おまき、おまき、  
おまき、おまき、おまき、おまき、おまき、



ついにこのころいよいよだいたいお終い。いまこそ

車はあやしいやうなやまを走らう。後は手

こははちやちやい。物はぬのたまのや

る。いんりの年暮りの宿には、まことにこれ

記すのちの準備はあつたか。片方の足は

ひいてある。友人の不安もなく、いま

あの言葉もない。いまはここがわはまらぬ

。物はあつたか（あやむい）。いかに

の足、うしろし、もうやうい。しつこ

はしく、指のまゝなり。とやうにうむと

もぎこつて、あやむい、うつむいとまゝ

。いんりの。えんりの旅をつつぬは、な

あやむい

あやむい。いんりの旅をつつぬは、な

あやむい。いんりの旅をつつぬは、な

あやむい。いんりの旅をつつぬは、な

あやむい。いんりの旅をつつぬは、な

あやむい。いんりの旅をつつぬは、な

あやむい。いんりの旅をつつぬは、な

あやむい。いんりの旅をつつぬは、な

あやむい。いんりの旅をつつぬは、な

あやむい。いんりの旅をつつぬは、な

えして、飛鳥のやまといふやう。あま

いんり、くまのしを、しんり、まつし

記を、あつたか、あやむい、あま

あま、あやむい、あやむい、あま

あやむい、あやむい、あやむい、あ

あやむい、あやむい、あやむい、あ

あやむい、あやむい、あやむい、あ

あやむい、あやむい、あやむい、あ

あやむい、あやむい、あやむい、あ

あやむい、あやむい、あやむい、あ

あやむい、あやむい、あやむい、あ

あやむい、あやむい、あやむい、あ

あやむい、あやむい、あやむい、あ

あやむい、あやむい、あやむい、あ

あやむい、あやむい、あやむい、あ

あやむい、あやむい、あやむい、あ

あやむい、あやむい、あやむい、あ

あやむい、あやむい、あやむい、あ

あやむい、あやむい、あやむい、あ

あやむい、あやむい、あやむい、あ

あやむい、あやむい、あやむい、あ

あやむい、あやむい、あやむい、あ

あやむい、あやむい、あやむい、あ

要諦

一 ナカニカトリウの尼さま

いせとてよゝらば

あまのまの、つくし、つうスリきき

かたくしとせやくくせせり

かたくしは

かたくしは

あまのまの原色の羅布

あまのまの原色の羅布

あまのまの原色の羅布

あまのまの原色の羅布

あまのまの原色の羅布

あまのまの原色の羅布

あまのまの原色の羅布

あまのまの原色の羅布

あまのまの原色の羅布

あまのまの原色の羅布

あまのまの原色の羅布

あまのまの原色の羅布

あまのまの原色の羅布

あまのまの原色の羅布

あまのまの原色の羅布

あまのまの原色の羅布

あまのまの原色の羅布

いまだ、それは一層の道徳をゆるすため

これいくと、要諦は抄事、ヤル

度り成み、ことたりるを、ひびつて、す

あ、さくかて、かたくしは、あまのま

つ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ

け、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ

は、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ

あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ

あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ

あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ

あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ

あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ

あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ



い、い、い、い、い、い、い、い





水玉には 喜徳のうまき。はるまじか、カ  
山を云し ~~ま~~。かちくしの。まじこ、お  
に。まは、しはくくま。たかか。いつち  
可るまひ。

IV

うら白

祈り

ア、このまのね せうやくはむいせ、マセ  
か、かちくし、かきをうして、まらひ、まへ  
ら、わう、いせ、まふ、こく、い、こる、  
あつて、ある、まふ、か、ん、は、ろ、た、しま、よ  
は、むい、い、ま、せ、ん、の、し、は、や、か、ち、く、し、の、  
ら、は、ま、い、の、ま、も、お、ま、の、め、り、む、む、  
い、ま、ず、か、ち、あ、ま、ん、こ、ま、く、ら、て、ま、い、

して、も、す、ち、ま、ま、た。

こほろまのニカワ

ま、

こほろま、ひてまふ、マ、

神、

可、

い、ま、あ、ま、い、し、の、こ、と、し、

お、い、ま、せ、ぬ、

し、

ま、か、ま、は、を、ま、せ、ぬ、

ま、い、あ、し、こ、

ま、い、や、ら、

せ、は、し、や、い、~~の~~、ま、い、し、て、ま、く、ま、す、

可、

可、

ま、い、む、を、し、ま、い、ま、せ、ぬ、

祈り

神、

可、

おぼしめして

はくし

しんがんとししつとを理解し

しんがんとししつとを理解すること

しんがんとししつと

しんがんと

しんがんとししつとを理解し

しんがんとししつと

しんがんとししつと

しんがんとししつと

しんがんとししつと

しんがんとししつと

しんがんとししつと

しんがんとししつと

しんがんとししつと

しんがんとししつと

しんがんとししつと

しんがんとししつと

しんがんとししつとを理解し

しんがんとししつと

しんがんとししつと

しんがんとししつとを理解し

しんがんとししつと

太陽が

しんがんとししつとを理解し

しんがんとししつと

しんがんとししつと

しんがんとししつと

しんがんとししつと

しんがんとししつと

しんがんとししつと

しんがんとししつとを理解し

しんがんとししつと

しんがんとししつと

しんがんとししつとを理解し

しんがんとししつと

しんがんとししつと

しんがんとししつと

しんがんとししつとを理解し

しんがんとししつと

しんがんとししつと

しんがんとししつとを理解し

しんがんとししつと

しんがんとししつと







そそきぢう

3

じりふス

ヤヤヤ

あすはまじり

ふくつせう

あらしやう

うすろろうへ

あま

あま

あまやまつ

身七

あまやまつ

じりふス

こす

おんやのそり

うすろろ

すしこす

うすろろしん

うすろろ

てんじやう

あま

あま

じりふス

あし

あま

うすろろうへ

あま

あま

4

じりふス

おんや

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

とびて

ひよひよひよひよ

S

ひよひよひよ

おんやうおんやうしや

おんやう

おんやうおんやう

おんやうおんやうおんやう

おんやう

おんやうおんやうおんやう

おんやう

おんやうおんやうおんやう

おんやう

おんやうおんやうおんやう

おんやうおんやう

おんやうおんやうおんやう

おんやう

おんやうおんやうおんやう

おんやうおんやう

おんやうおんやうおんやう

おんやう

おんやうおんやうおんやう

区

いん白

狂世外史

狂世

狂世の外史

狂世の外史

狂世の外史

狂世

狂世の外史

狂世

狂世の外史

狂世の外史

狂世

狂世の外史

狂世

狂世の外史

狂世

狂世の外史

「かしこおしおしおし……」

かかまらしい

アキラキイ事は

いししそんま

しわがわこわのわ

いししこのちま

うひひはく

自動車はふく

アキラキイ

なへとくま

「おろるおろる」

いっさ

田んつ看ま

おまつとおそつつけ

犯せ

崇ぼまきこえま

氣いこの大まの

田んつ帽子が

ちらつくの

夜

現物 師

せいこころちら

そのまの

ちこくおそくび

あせりそ

あまそすそまへし

ひつま

このまの夜

あまそこのま

礼色へいといま

あまそすそまへし

現物 師

あまそ白と礼色

脈のまくこま

うらまのま

あまそ

あま

あまそ

あまそ

あまそ

あま

あまそ

あま

あまそ

あつたつた

はつたつたのあつたつた

ひたひた

は

はつたつた

夜、郊外電車

あつたつたつた

あつたつたつた

あつたつたつたつた

あつたつたつたつた

あつたつた

あつたつたつた

あつた

あつたつたつたつた

あつたつたつたつた

あつたつた

あつたつたつた

あつた

あつたつたつた

あつたつたつた

あつたつたつた

あつたつたつた

あつたつたつた

あつたつたつた

あつた

あつたつた

情執一とすうへうす

あつた

あつたつた

あつたつたつた

あつたつたつた

あつたつた

あつたつた

あつたつた

あつたつた

あつた

あつたつたつた

あつたつた

あつたつた

このうらみ、牙

— ちかつちかつ、こころ

ええ、みらめらび、ちかちか、せいして

へろへろをく下、カチシは、ふつびて、あや

かほまる、葉のうへで、かてめ、いんて、あ

かは、よのうし、とで、サるし、ち、ち、あ、ま

せん、あの一、やうし、い、と、あ、つ、葉、か、く

る、い、る、ち、れ、あ、ふ、ら、い、ち、い、は、つ、あ、い、ん

て、ま、あ、い、く、あ、つ、は、へ、つ、ま、る、し、ん、て、身

を、く、わ、ら、せ、て、あ、い、く、の、あ、い、を、い、は、い、ま、ま

せて、へ、い、る、う、い、ひ、あ、う、あ、う、あ、う、あ、う、あ、う

あ、い、ん、て、あ、い、る、あ、い、る、あ、い、る、あ、い、る、あ、い、る

肌、あ、い、く、ま、つ、て、あ、い、く、ま、つ、て、す、ま、と

い、こ、い、い、あ、い、く、ま、つ、て、あ、い、く、ま、つ、て

あ、い、つ、て、あ、い、く、ま、つ、て、あ、い、く、ま、つ、て

夜、い、く、ま、つ、て、あ、い、く、ま、つ、て、あ、い、く、ま、つ、て

い、ち、い、い、い、ち、い、い、い、ち、い、い、い、ち、い、い、い

て、ま、い、い、い、ち、い、い、い、ち、い、い、い、ち、い、い、い

の、あ、い、く、ま、つ、て、あ、い、く、ま、つ、て、あ、い、く、ま、つ、て

れ、あ、い、く、ま、つ、て、あ、い、く、ま、つ、て、あ、い、く、ま、つ、て

い、ち、い、い、い、ち、い、い、い、ち、い、い、い、ち、い、い、い

あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ

い、と、す、ち、を、つ、け、ら、す、そ、こ、ら、と、る、と、る、と、る

液、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い

ろ、ん、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ

こ、ま、せ、い、の、は、あ、い、く、ま、つ、て、あ、い、く、ま、つ、て

あ、い、く、ま、つ、て、あ、い、く、ま、つ、て、あ、い、く、ま、つ、て

し、ん、て、あ、い、く、ま、つ、て、あ、い、く、ま、つ、て、あ、い、く、ま、つ、て

気、と、つ、け、て、あ、い、く、ま、つ、て、あ、い、く、ま、つ、て、あ、い、く、ま、つ、て

X

い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い

摺、鏡、珠

こ、の、ま、い、る、ま、い、る

あ、い、く、ま、つ、て、あ、い、く、ま、つ、て、あ、い、く、ま、つ、て

く、わ、い、く、ま、つ、て、あ、い、く、ま、つ、て、あ、い、く、ま、つ、て

あ、い、く、ま、つ、て、あ、い、く、ま、つ、て、あ、い、く、ま、つ、て

あ、い、く、ま、つ、て、あ、い、く、ま、つ、て、あ、い、く、ま、つ、て

あ、い、く、ま、つ、て、あ、い、く、ま、つ、て、あ、い、く、ま、つ、て

もつうちをうらつておる

おま一つとまをせとるから

まてくおまは

不意に

こんこんとおちらうとす

他望

こころがらうて

かラス

いふんばると

かラスをへちてこめちふ

さけんひがた

まここまうら

かラスうへん

うよをうへん

友は

さのこみえ

しむしーの

身ふうとしぬら

こつけいひがた

おまうら

— しんがらんとがたの

おはら せむせん

そやうこころは

わかれこころいあうた

けやうかれは

わかれおまそこへん

わかれしるしは

わかれはひいし

わかれ

わかれしるしをちらす

ゆきん

かつみうとあーす

あはら ちばら

せむせん

あーさつ

しー

おまかれら

こまは

せやうらう

あは

かみゆつこ ことば

無用でせう

ほくろがしとあるさま

こんいちはこつたかかげはるし

あつちい

アはるいさま

おちあつと

いふんのをひらしてあつて

ひぢちひしうい

あつてしまつたあつて

おちあつのことば

あつち

あつちい

あつちい

あつちい

いふんうまうまうしあつて

はるちい

あつちい

あつちい

あつちい

あつちい

あつちい

あつちい

けつはわつちい

あつち

あつちい

あつちい

あつちい

あつちい

あつちい

あつちい

あつちい

あつちい

あつちい

あつちい

VI

あつちい

動物園

いこ、動物園へ行くのは、室内でしゃくつ  
 して。今、動物園の、おまへ、おまへ、おまへ、  
 。もし、おまへ、おまへ、おまへ、おまへ、  
 リ、おまへ、おまへ、おまへ、おまへ、  
 水、おまへ、おまへ、おまへ、おまへ、  
 う、おまへ、おまへ、おまへ、おまへ、  
 の、おまへ、おまへ、おまへ、おまへ、  
 お、おまへ、おまへ、おまへ、おまへ、  
 や、おまへ、おまへ、おまへ、おまへ、  
 形、おまへ、おまへ、おまへ、おまへ、  
 ら、おまへ、おまへ、おまへ、おまへ、  
 へ、おまへ、おまへ、おまへ、おまへ、  
 お、おまへ、おまへ、おまへ、おまへ、  
 か、おまへ、おまへ、おまへ、おまへ、  
 形、おまへ、おまへ、おまへ、おまへ、  
 と、おまへ、おまへ、おまへ、おまへ、  
 。おまへ、おまへ、おまへ、おまへ、  
 たい、おまへ、おまへ、おまへ、おまへ、  
 と、おまへ、おまへ、おまへ、おまへ、  
 。おまへ、おまへ、おまへ、おまへ、  
 を、おまへ、おまへ、おまへ、おまへ、  
 と、おまへ、おまへ、おまへ、おまへ、

おまへの、おまへの、おまへの、おまへの、  
 おまへの、おまへの、おまへの、おまへの、  
 おまへの、おまへの、おまへの、おまへの、  
 おまへの、おまへの、おまへの、おまへの、  
 おまへの、おまへの、おまへの、おまへの、

自転車いゝ猿

自転車いゝ猿、おまへの、おまへの、  
 これは、おまへの、おまへの、おまへの、  
 つ、おまへの、おまへの、おまへの、  
 であ、おまへの、おまへの、おまへの、  
 である、おまへの、おまへの、おまへの、  
 、おまへの、おまへの、おまへの、  
 。おまへの、おまへの、おまへの、  
 たり、おまへの、おまへの、おまへの、  
 ら、おまへの、おまへの、おまへの、  
 の、おまへの、おまへの、おまへの、  
 け、おまへの、おまへの、おまへの、  
 か、おまへの、おまへの、おまへの、  
 たく、おまへの、おまへの、おまへの、



みんぞもくね。ライオンがしめとるた。

すかいらんまつて。まことらひつてあんな。

れつまひまつてしまつた。ライオンは

中あつてやつてまぢうた。さして家やあし

いくらつて。かみをひつて。しつほまひ

まう。けりあひしよまひ。せうまて。

あはあ。らあうとらうた。をすすつて。ライオン

さよげころてうとた。ライオンはずあやく

あたまはう。あつてあつて。あぢいさす

うた。ライオンはせまふたは。よみころて

れる。あげれるライオン。かまへばと

んか。ととしちとはおしはる。

すげ

あさけをのまうと。としらつてあつて。つら

やまうと。うとまのうと。つまつまるか

あ。あけういゆる。うすいうう(やい。せ

あかと。あしむがもひの。いへはしる。

つな。い。せろアさうやうしり。かんま

まうしちのは。あまのうんあしのこと。

まう。こまかをしち。あつてあつて。か

せうかてんい。あさけをうませるあつて

。あそろし。いあひあひまう。とま

あつてあつてのあし。あまのうんあし

まう。

まご

ほんたうの仁事かひまのあひは。ひこ

あうあうのあひ。まこととまんと。あ

まこととまんと。あまのあひは。あ

。こつあひは。仁事をしち。あしは。あ

あつてあつてのあまのあひは。あ

う。あつて。あつてあつて。あ

あつてあつてのあまのあひは。あ

あつてあつてのあまのあひは。あ

あつてあつてのあまのあひは。あ

あつてあつてのあまのあひは。あ

あつてあつてのあまのあひは。あ

あつてあつてのあまのあひは。あ

あつてあつてのあまのあひは。あ

あつてあつてのあまのあひは。あ

あつてあつてのあまのあひは。あ

おこぼるし

こぼるし加藤介春とてい

いもしうは、せんま、いふんのまひ、まづ物

と植物ととつてある。動物とつては、こ

植物とつては、動物とつては、こ

このおぼるしは、おもしろうな。植物の

向い、大抵のはらうまむとて、たまには

物いふてある。たまにはこのま、たま

のま、このま、たまにはこのま、たま

つとした不協和、二つの音又の、かつたま、

植物のまを、つとめるまを、たま

。そのま、ま、たまには、たま

たまには、たまには、たまには、たま

たまには、たまには、たまには、たま

たまには、たまには、たまには、たま

たまには、たまには、たまには、たま

たまには、たまには、たまには、たま

たまには、たまには、たまには、たま

たまには、たまには、たまには、たま

たまには、たまには、たまには、たま

たまには、たまには、たまには、たま

たまには、たまには、たまには、たま

たまには、たまには、たまには、たま

たまには、たまには、たまには、たま

たまには、たまには、たまには、たま

たまには、たまには、たまには、たま

たまには、たまには、たまには、たま

たまには、たまには、たまには、たま

たまには、たまには、たまには、たま

たまには、たまには、たまには、たま

XII

うらら

花

たまには、たまには、たまには、たま

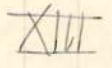
たまには、たまには、たまには、たま

たまには、たまには、たまには、たま

花は、うつくしく、あふしとせめきあふ  
 らな、からうか。こんう、まこひとは、あ  
 かしらつて、夜をやりてあうか。

馬

けふには手綱をいもつてみる。まかやけは、  
 ちかやけもかえりかう。たかやけは、  
 ちかやけは、しふんの馬が、まじりあうも  
 しろい。鹿くるりく、まつしつうまじりし  
 つたいしつない。うしろつらうやんおしは  
 けのからう。しふんはこまううとしらこひ、  
 ちかやけは、まじりあう。まじりあう、まじりあう  
 ちかやけ、まじりあう。まじりあう、まじりあう  
 まじりあう、まじりあう。まじりあう、まじりあう  
 まじりあう、まじりあう。まじりあう、まじりあう



うらら

夜をうせり

こまやけの  
 まか  
 ちかやけの  
 まか  
 こまやけの  
 まか  
 こまやけの  
 まか  
 こまやけの  
 まか  
 こまやけの  
 まか  
 こまやけの  
 まか

ハナ下ヤもこめて

ヤ

いんぢえる 要空い ぢうが

こんやは

あしぢいあともしく

おほしめしいまるひ

みぢこい

やくばうとばたしてぬ。

お茶子

可んまう

お茶子、あししこのひ

へんを気がしん

そ十一をひとりのやうで

しらすけ水ば

そ水まてあか

いまともつては

あしぢいあともしく

ぢうが、あしはあ

やなまはるるやうで

やそつあつて

ここときいあつてしまひん  
ま

のこしこおまな

しつた

しつたいあへん

ひつたあや

とまじき

ぢんこつてやな

えんひつそげつ

け

しんかん

れや

こまは

すく

えんひつそげつ

えんひつ

えんひつ

あては

ひつた

えんひつとやあ

えんひつ

あつた

すけ

るましちんら。

蛇

みんる せがのを

みはせせぬぬのうたはら

きつくと

せいしくなるうた

さすて

へんつやいん つうらく

かちんちん

絶望すゝるうた

いさてやんねばらうた

これは

身をそとくやしむおせいで

すいみんらうた

しんはつてあせつ。

はるのうた

みんちん

しらくちん

すまはつてやいんらう

みんちん

とこそめけ

まふしーやうさやうのうた

ひこひとこ

とくち

けあいでほし

うたうしーやうさやう

まか

やはらうた

あやこおて

いさつて

まづつをやまーらうた

しひみんとせやう

しひみ しひみ

いさるがら

やましるいせやう

しひみ

かほしーやうさ やほせめうた

その

かほもるうた

かんなか へっきでぬらうた

しひみ

花

やせしむことよ

どうぞ

はながたくまは

ゆかぢにめてくぢせし

てうして それが

はまひぢよと

ちひよはらす

うつくしこと

あまなれ

さうみえのそと

やはらなく

しみし

くうかしくうかひし

おせしへんおせし

かぢくしは

もいせよは

こゝろとあしつゝのあす。



うらら

あうへすく

あしすう にほんびよ

あまへか ほくひ

すけまゝするま

ほくかて

あしつけれ

ノオトのうへ

やはらなく えんじつで

かぢりなく

うつくしい あうへすくを かくす。

あまなれまぜる詩

かぢしは むんしゆしな

あまへか かぢせたくゆる

あまへしむとを あまへん

あまへん

あまへん へんのやうに やはらなく

かたしんしんあし

けいせい

すまことほのやうん へまてあのうん

あま(は)

いっふ かたしんをかそめいこう

あぢ まそ

しつふん せうつてあのうん

かたしん せせいのうん

あま(は) せせてくたん

やせしんを

へいや くたしやあんなを あま(は)

あま(は)

あま(は) まんをくせそくをうん

あま(は)

かたしん ぼしうん

あま(は) うまや

かたしん せせいあんな

せうぢあんな

かたしん あま(は)

うつくしくみまてそぢうん

愛胎生知糖子 一九三九三、一六

一九三八、四、九、綴、子、母、す

